北京・ロンドンオリンピックから見る東日本大震災
Study of the Great East Japan Earthquake from view point of Beijing and London Olympics.

1K08A195　　増井　令子
指導教員　主査 リー・トンプソン 先生　　副査 石井昌幸 先生

【目的】

２０１１年３月１１日１４時４６分頃、宮城県東南東沖１３０キロメートルの海底を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生した。スポーツ界も多くの影響を受けた。多くの大会や試合は中止され、グラウンドやスタジアムが液状化や損傷の被害を受けたチームは、チーム運営や練習の中止までも余儀なくされた。

しかし同時に、この大地震の発生以来多くのアスリートが被災地へ足を運び、スポーツ教室を開催するなど、アスリートによる支援やチャリティイベントの開催により、スポーツが復興支援に貢献したと言う事実もある。

「スポーツ」は、どのように社会に貢献し、私達にどのような付加価値を生み出したのか。メディアを通じスポーツがどのように描写されているのかを明らかにし、エンターテイメント性や遊戯的側面の他にスポーツの社会的意義を明らかにする必要があるとの問題意識を持ち、この研究をするに至った。

【方法】

聞蔵ビジュアルⅡを利用して朝日新聞の記事を参照した。調査期間はそれぞれの大会開幕三か月前から閉幕２週間後で、北京オリンピックは２００８年５月８日～９月７日（開催期間：２００８年８月８日～２４日)、ロンドンオリンピックは２０１２年４月２７日～８月２６日（開催期間：２０１２年７月２７日～８月１２日）とした。

分析対象は、北京オリンピックとロンドンオリンピックの両大会に出場している日本人選手で、それぞれの選手氏名で検索をかけた。分析は自ら作成したコーディングシートに基づいて行った。

【結果】

第一に、記事本数の増加が見られた。北京オリンピックからロンドンオリンピックの東北関連選手の記事本数は、どの増加数をとっても一般選手より増加率が高かった。また、一般選手に関して、記事本数の増加している記事のほとんどに北京オリンピックからロンドンオリンピックにかけての成績の上昇が見られた。

第二に、記事内容はにも差異が見られた。一般選手は北京オリンピック、ロンドンオリンピック共に、競技や成績に関する記事が最も多かった一方、東北関連選手は競技や成績、その他に関する記事が最も多かった。また、一般選手は北京オリンピックからロンドンオリンピックにかけて故郷関連記事の本数に大きな変化は見られなかった一方、東北関連選手の故郷関連記事（東北地方）本数は、２倍近くに跳ね上がっていた。

第三に第三者の登場であるが、一般選手、東北関連選手共に、数値に若干の増加が見られた。

【考察】

一般的に記事の本数の増減には、アスリートの競技成績が関連していることがわかった。

また、東北関連選手に関して、北京オリンピックからロンドンオリンピックにかけての競技成績の上昇による記事数の増加割合が少なかったため、記事数の増加と競技成績の関連性は薄いと考えられる。一般選手の記事本数では成績の上昇との関連性が証明された一方で、東北関連選手でその関連性は見受けられなかったことから、第三者との関連付けは少なくとも、東北関連選手が故郷である東北地方、さらに東日本大震災で被災した故郷と、何かしらのドラマやヒーロー像をもって描写されていることがわかる。

以上の結果から、東日本大震災以降初めてのロンドンオリンピック記事では、東北関連選手には競技成績や出場回数に関連づけがたい記事数の増加が見受けられることが検証された。

今回の研究により東日本大震災により東北関連選手の記事本数の増加、そして第三者との関連付けは少なかったものの、ドラマ化、ヒーロー化されたアスリート記事の増加が認められた。マスコミは、私達の深層心理にある欲求にのっとり、絆や復活を思わせる記事を描写したのだと考えられる。

メディアがスポーツやアスリートをこのように利用し、地域とアスリート、国と彼らの成功を関連付けることで、彼らの活躍を東日本大震災からの復活意識や、日本の社会的団結に繋げようとする作用を果たす事ができたのではないか。このような観点から、私はスポーツが社会に貢献していると言えると考える。